

## 佯狂者アンドレイ伝—翻訳と解題

三 浦 清 美

### The Life of Andrei Salos — Translation and Commentary

Kiyoharu MIURA

#### Abstract

The author in this bulletin provides his translation and commentary of the Life of the Saint Andrei Salos.

Salos means a holy fool in Greek. Besides Andrei, we know Byzantium Salos Simeon from Edessa, a city in upper Mesopotamia, in the 6<sup>th</sup> century. Stimulated by the words of Paul (1 Corinthians 3:18-19) “If any of you think you are wise by the standards of the age, you should become “fools” so that you may become wise. For the wisdom of this world is foolishness in god’s sight”, they went after Jesus Christ by pretending to be insane, looking foolish in the eyes of ordinary people and suffering from their mocking. This tradition flowed into Russia and developed particularly in the rising Moscovian principedom.

Andrei Salos is supposed to have lived in Constantinople in the 9<sup>th</sup> century. His hagiography was written in Greek in the 10<sup>th</sup> century, perhaps in Constantinople. It was translated into medieval Russian in the 11<sup>th</sup> century through the beginning of 12<sup>th</sup> century. It is not clear where the translation took place.

However, his hagiography was already known in medieval Russia in 1164, when Andrei Bogolyubski, the prince of Vladimir, virtual ruler of Old Russia in those days, constructed the cathedral Pokrov-na-Nerli in memory of the victory against Bolga Bulgars. In Russian Pokrov means the guard of the Mother of God from the threat of enemies, which episode in Constantinople is mentioned in the Life of Andrei Salos. In the reign of Leo VI the Wise (886-912), Constantinople was believed to have been saved from the Arab siege because of the clothes of the Mother of God, which came down to the cathedral of Blachernai from Heaven during the battle.

#### はじめに

筆者は、中世ロシア文学の基本的な作品群を、『電気通信大学紀要』、『エクフラシス』（早稲田大学中世ルネサンス研究所）、《Slavistika》（東京大学大学院人文社会系研究科スラヴ語スラヴ文学専攻）、『古代ロシア研究』（古代ロシア研究会）などに連載し、このシリーズを「中世ロシア文学図書館」と名付けてきた<sup>(1)</sup>。現在まで第15集が刊行されているが、本稿は「中世ロシア文学図書館」の第16集となるもので、ビザンツの佯狂者聖人、アンドレイにかんする聖者伝のスラヴ語版聖者伝を日本語訳する試みである。

ビザンツで佯狂者として知られる聖者は、6世紀のシメオンと10世紀のアンドレイのみだが、この修行形態はいくぶんの変質をこうむりながらロシアにも流入し、ことにモスクワ大公国勃興期、隆盛期（15-16世紀）に著しい発達を遂げた。ポラン派聖者伝編者のヤンニングは、『佯狂者アンドレイ伝』が950年ころおそらくはギリシア語で書かれたと考えているが、ギリシア語原典の成立についてはヤンニングのこの見解がほぼ定説となっている<sup>(2)</sup>。19世紀後半のウラジーミル大主教セルギイによれば、スラヴ語訳ができたのは11世紀か12世紀はじめであり、現代の研究者A. M. モルドヴァンもこれに異を唱えていない<sup>(3)</sup>。すなわち、10世紀にお

そらくはコンスタンティノープルでギリシア語で書かれ、11世紀から12世紀初めにかけて中世ロシア語に翻訳された、東スラヴ語版の『佯狂者アンドレイ伝』が、本稿の翻訳の対象である。底本として用いたテキストはA. M. モルドヴァンの校訂によるもので、このテキストは、20巻完結で現在19巻までが刊行されている「中世ロシア文学文庫 Библиотека литературы древней Руси」の第2巻に収録されている<sup>(4)</sup>。

なお『佯狂者アンドレイ伝』は、本稿において完結しておらず、続稿を予定している。

### 〈翻訳〉

この本は、聖なる至福なる師父、我らがキリストゆえの佯狂者アンドレイと、我らが聖なる師父、コンスタ

- (1) 「中世ロシア文学図書館」のこれまでの掲載作品は以下の通りである。
- (I) 「モンゴル・タタールのくびき」『電気通信大学紀要』22巻1号（通巻38号）、2010年、p.145-165、《ウラジーミルのセラピオンの説教》、《スモレンスクのメルクーリイについての物語》、《キーテジ伝説》、《チェルニーゴフ公ミハイルとその貴族フェオドルのハーン宮廷における殺害についての物語》。
- (II) 「ボリスとグレーブにまつわる物語」『電気通信大学紀要』23巻1号（通巻39号）、2011年、p.43-74、《聖なる殉教者ボリスとグレーブに捧げる物語》、《聖なるキリストの殉教者ロマンとダヴィドの奇跡にかんする物語》、《聖なる殉教者ボリスとグレーブの生涯と死にかんする講話》。
- (III) 「中世ロシアの説教①／非業に斃れた公たち」『電気通信大学紀要』24巻1号（通巻40号）、2012年、p.77-109、《府主教イラリオンの律法と恩寵にかんする講話》、《聖ヴァチェスラフ伝》、《アンドレイ・ボゴリュプスキイ公殺害の物語》、《トヴェーリ公ミハイル・ヤロスラヴィチ伝》。
- (IV) 「アポクリファ①」『電気通信大学紀要』25巻1号（通巻41号）、2013年、p.61-71、《ラザロ復活によせる講話》、《十字架の木についての講話》。
- (V) 「1453年のトルコ人によるツァリグラード征服についての物語」（平野智洋と共編）『エクフラシス』別冊1号、2014年、p.119-159、《1453年のトルコ人によるツァリグラード征服についての物語》。
- (VI) 「プスコフの歴史と文学①」『電気通信大学紀要』27巻1号（通巻43号）、2015年、p.61-89、《ステファン・パトリーイのプスコフ来襲の物語》。
- (VII) 「アポクリファ②」『電気通信大学紀要』28巻1号（通巻44号）、2016年、p.21-47、《至賢アキルの物語》、《エリフェリイの12の金曜日についての物語》、《メルキゼデクについての物語》、《アフロディティアンの物語》、《アブガル王についての物語》。
- (VIII) 「プスコフの歴史と文学②」Slavistika XXXI、2016年、p.387-407、《プスコフ征服の物語》、《「第3のローマ理念」をめぐる長老僧フィロフェイの書簡》。
- (IX) 「プスコフの歴史と文学③」『古代ロシア研究』24号、2017年、p.57-94、《プスコフ洞窟修道院についての物語》。
- (X) 「ステファニトとイフニラト」『電気通信大学紀要』29巻1号、2017年、p.1-26、《ステファニトとイフニラト》。
- (XI) 「1204年の十字軍によるツァリグラード征服の物語」（平野智洋と共編）Slavistika XXXII、2017年、p.323-342、《1204年の十字軍によるツァリグラード征服の物語》。
- (XII) 「中世ロシアの説教③ トゥーロフのキリルの説教」『電気通信大学紀要』30巻1号、2018年、p.1-34、《人間の魂について、肉体についての講話》、《白僧と修道士たることについての講話》、《スヒマ僧についての修道院長ワシーリイへの書簡》、《柳の日曜日についての講話》、《復活祭のあとの新しい日曜日の講話》、《キリストの身体の子架降下についての講話》、《病気で弱った者についての講話》。
- (XIII) 「プスコフの歴史と文学④」『エクフラシス—ヨーロッパ文化研究』8号、2018年、p.82-107、《ドヴモントについての物語》、《修道院長パンフィールの書簡》、《シニチャ丘における神の御母のイコンの顕現についての物語》、《プスコフのニコンドル伝》。
- (XIV) 「所有派と無所有派の論争—ヨシフ・ヴォロツキイ、ヴァッシアン・パトリケーエフ、ニル・ソルスキイの作品」『電気通信大学紀要』31巻1号、2019年、p.1-26、ヨシフ・ヴォロツキイ《ヨシフ・ヴォロツキイの異端者たちへの論難についての講話》、《ゴレニナ公夫人へのヨシフ・ヴォロツキイの書簡》、ヴァッシアン・パトリケーエフ《ヨシフ・ヴォロツキイの異端者の論難についての書簡にたいするキリル修道院の答え》、ニル・ソルスキイ《ヴァッシアン・パトリケーエフへの書簡》、《グーリイ・トゥーシンへの書簡》、《ゲルマン・ポドーリヌイへの書簡》、《東方の国から来た兄弟への書簡》、《遺言》。
- (XV) 「セルギイ伝①」（丸山由紀子と共編）『エクフラシス—ヨーロッパ文化研究』9号、2019年、p.31-67、《ラドネジのセルギイ伝 解題と翻訳 (1)》。
- (2) Житие Андрея юродивого в славянской письменности. М.; Азбуковник, 2000, С. 7-10.
- (3) Житие Андрея юродивого. С. 17.
- (4) Житие Андрея Юродивого (Подготовка текста, перевод и комментарии А.М. Молдована) // Библиотека литературы Древней Руси (Дальше БЛДР). Т. 2. С. 330-359, 541-544.

ンティノーブル総主教エピファニーの生活とその生涯

第一の講話。いかにして彼が佯狂者になったか。

私の親愛なる者たちよ、善良なる気質の男の、神に気に入られた生涯と非の打ちどころのないその生活について、私は語りたいと思う。このゆえに、私はそなたたちに私の話を注意深く聞いてもらうことを望んでいる。なぜなら、この物語は、蜜のように甘い芳香を放ち、甘美な驚くべき聖膏の芳しい香りがするからである。このゆえに、魂のすべてをかけてこの話を味わい尽くすよう心の準備をなさい。そうすれば、そのことで私は奮い立ち、この物語を語りはじめ、あなたたちのまえにこの男の精神の偉大さを開示することができる。

キリストを愛する皇帝、偉大なるレオン<sup>(5)</sup>が帝位にあった時代、コンスタンティノスの町に、テオグノストスという名前のある男がいた。敬虔なる皇帝はこの男にプロトスパファリイ<sup>(6)</sup>の称号をあたえ、東方諸邦の司令官<sup>(7)</sup>に任命した。

この男はすでに多くの隷属農民をもっていたが、このあとあらたにさらに多くの新しい奴婢を買った。そのなかにこれから私たちが謙虚な心で物語ろうとする人間がいたのである。その男は、スラヴ人の生まれであった<sup>(8)</sup>。

主人がほかの者たちとともに彼を買ったとき、彼は、外見はほかのすべての人々よりも若く、たいへん美男だったので、主人は彼のことを惜しみ、自分の身の回りの世話をさせることに決めた。彼はギリシア語をしゃべることができなかったが、主人は直ちに彼に聖書を学ばせた。

彼はたいへん頭が良かったので、『詩篇』と、四則演算と、彼の教師が彼に教えたことをすべて覚えきった。だから、教師はその達成の速さに驚いた。誰も彼のことをスラヴ人であるとは思わなかった。なぜなら、彼は顔が美しく、精神的な理性も持ち合わせ、肉体的な力も強く、きれいな字を書くことができたからである。

このゆえに、主人は彼にあらゆる必要な分野において、秘書の仕事を行わせることにした。彼は熱心にかつ入念にこの仕事に取り組んだので、このゆえに彼は主人とその妻、その家族全員に愛された。

テオグノストスは彼に大いなる敬意を表し、自らの衣服をあたえた。なぜなら、主人は、この男が一生懸命自分の所領に気を配っているのを見たからである。彼のことを見た者は「奴隷が自分の主人よりもいいものを着ている」と言ったものである。

彼はしばしば教会をめぐる歩き、神の霊を孕む書物、もっとも頻繁には聖人たちの殉教物語、聖者伝を読むことを好み、彼の心臓は彼らと同じような生活をしたという望みで燃え上がった。彼は魂の奥底から、正しい生活をはじめようと決心した。

ある夜、彼は祈りを捧げようと、自らの寝台から起き上がり、「夜半に起きてあなたに罪の告白をします」と言った者のまねびをしたのである。邪悪な悪魔は彼の善良な所業を見ると羨望に駆られ、この若者が住む家にやって来てその扉をけたたましく叩いた。若者は恐怖のあまり仰天して、祈りをやめ、急いで寝台に横になると、山羊の皮にくるまった。なんということだろう、サタンはこれを見て大喜びして自らの連れに言うかのように嘯いた。「こいつを見たか。たったいま、薄いスープを飲んだだけのくせして、それなのに俺たちに喧嘩を売ろうっていうんだからな。」こう言うと、いなくなってしまった。

この至福なる者は恐怖のあまりぐっすり眠りこんでしまった。夢のなかで彼は、自分が劇場のようなところにいるのを見た。一方の側に、おびただしい数のエチオピア人がいた。もう一方の側に白い衣を着た人たちとほかの聖者たちがいた。両者のあいだに駆け足競争と拳闘についての論争が起こった。エチオピア人たちは自分たちの味方に、ある黒い巨人を擁して、そこに集まった白い衣の者たちに、「おまえたちのなかに、この黒い巨漢と、駆け足競争と一対一の殴り合いができる者はいないのか」と訊ねている。というのは、彼らが言う

(5) 明らかに、ビザンツ皇帝レオン6世賢帝(886-912)を指している。

(6) 基本的に軍人によって占められた、ビザンツ帝国中流層の称号。

(7) ギリシア語原典では、「στρατηλάτης...εν τοῖς ανατολικοῖς μορτισιν」

(8) ギリシア語「σκίθης」(«скиф», 「スキタイ人」)。中世ロシア語への翻訳者は、ビザンツ文学では、ビザンツ帝国から見て北方に住むさまざまな民族、ことにブルガリア人、ルーシ人が「スキタイ人」と呼ばれることを知っていた。

には、この大男は多くの者たちと殴り合いをしたが、誰一人、どこの場所であろうとも、まともに渡りあえた者がいないというのである。というのは、この巨人は悪魔の貪欲な軍勢の千人長だからである。

連中がこのように自慢しているあいだ、至福なる者は立って聞いていたが、白い衣の人々は答えることができなかった。すると、一人の非常に美しい若者が三つの冠を手の上のほうから降りてきた。一つはきれいな金と宝石で、もう一つは輝きを放つ大きく高価な真珠で飾られており、最後の一つは前の二つよりも大きく、あらゆる色調の赤と白の色とで、神の天国の朽ちることのない枝を使って編み上げられていた。それらからは、人間の知恵では表現できないような芳香が立ちのぼっていた。

これを見ると、アンドレイはそのうちの一つでいいから譲り受けたいと思い、嘆き苦しみはじめた。アンドレイは若者の姿をしたその方に近づくと、こう言った。「キリストのためにどうかその王冠を売ってはくれませんか。もしも私がそれを買うことができないならば、少しだけ待ってもらえないでしょうか。ひとつ走り私が主人のところに行けば、主人はそなたにそなたが望むだけ黄金をくれるでしょうから。」

若者は彼に微笑して答えた。「大切な人、どうか私を信じてください。この世のありとあらゆる黄金をもってきたとしても、私はあなたにも、ほかの誰にも、ほんとうにいるかどうかわからない、そなたのご主人様にも、この冠はどれ一つとしても引き渡しますまい。なぜなら、これらの冠は、そなたが考えているような、空虚なるこの世のものではなく、これらはキリストの桂冠という天の宝物であり、これらの黒い奴らに打ち勝った者だけが被ることができるのですから。もしもそなたが冠を一つだけではなく三つ全部ほしいというなら、行ってこの黒いエチオピア人と戦ってくるがよい。もしもそなたがああ巨漢に打ち勝つことができたなら、これらの冠ばかりではなく、それよりももっとよいほかの冠をも、そなたが望むだけそなたは私から受け取るでしょう。」

アンドレイはこれを聞くと、その言葉に奮いたち、くだんの若者にこう言った。「あなたが私に言ったとおりに私がするというのを信じてください。ただその騙しの技について私に教えてほしいのです。」若者は彼に言った。「あなたはその騙しの技を知らないのですか。エチオピア人というのは恐ろしげで怖いように見えますが、じつは無力ではないのですか。その巨大な身長と恐ろしげな外見を恐れてはなりません。腐った草のように、それは朽ちていて脆いのです。」

こうした言葉で若いアンドレイを励ますと、この美しい若者はまるでアンドレイと戦おうとするかのように、アンドレイをつかむと、どうやったらエチオピア人と戦うことができるかを、アンドレイに教えようとはじめた。そして、アンドレイの耳元にこう言った。「エチオピアの巨漢がそなたをつかみ、振り回そうとはじめたら（そうなることは私にはわかっていますが）、ゆめ恐れることがあってはなりません。思いきりその巨漢にしがみつくとよい。そうすれば、そなたは神の栄光に見（まみ）えることでしょう。」

至福の者はただちに戦いの場に出て大声を張りあげてこう言った。「煤まみれ野郎、こっちに来い。一騎打ちだ。」エチオピア人はこちらに来ると、荒い息を立てて威嚇し、アンドレイをひつつかんだかと思うと、彼を振り回しはじめ、長いあいだ振り回していた。エチオピア人たちは拍手喝采し、白い衣を着た者たちは青ざめ、いまにこの黒い奴がアンドレイを地に叩きつけるだろう、そうすればアンドレイの両目が飛び出してしまうと考えた。アンドレイはぐるぐる振り回されながらも好機をつかみ、エチオピア人の足に思い切りしがみついた。この悪魔は吹っ飛んで額をしたたかに岩にぶつけるや、大声で悲鳴をあげた。

白い衣の者たちは大喜びで大いに拍手喝采した。この義人を自らの手で胴上げすると、彼の顔に接吻し、魂を育む聖膏を塗った。一方、このとき、かの黒い者たちは大恥をかいてちりぢりに逃げ去った。あの美しい若者はアンドレイに聖なる冠をわたし、彼に接吻してこう言った。「富とともに行くがよい。これからは、あなたは私たちの友人であり、兄弟です。よき功業に励むのです。私のために裸でいて狂者のごとく振る舞うのです。私の王国が来る日、そなたは大いなる福を授かるでしょう。」

これを聞いて至福の者は、深い眠りから目覚め、自分の身のうえに起こったことに驚きを覚えた。なぜなら、彼は自分の唇に芳香を感じていたからである。彼の顔もまるで、どこから漂ってくるかわからない神の芳香のごときいい香りを放っていた。

翌日、アンドレイはそれにふさわしくない私のところに来て、覚悟を決めて私に自分の身に起こったことに

ついて話した。アンドレイの話を聞き終わると、私は彼の見た夢に驚いた。私たちは相談して、これ以後、アンドレイは変わらなければならない、気の触れた悪魔つきのようにふるまわなくてはならないと決めた。それは、「私のために狂者のごとく振る舞うのです。私の王国が来る日、そなたは大いなる福を授かるでしょう」とアンドレイに言った者のためである。

さもなければ、アンドレイは自分の地上の主人のもとから逃れることはできなかったであろう。というのは、誰も自分の奴隷を自由の身にしたがらないし、それが神に仕える場合であつたらなおさらのことである。なぜなら、悪魔は嫉妬によって奴隷の解放を妨げようとするからである<sup>(9)</sup>。

あくる夜のことである。アンドレイは夜中に起きあがると祈りを捧げた。祈りおえると、ナイフを手に取り、彼の主人の寝室のわきにある井戸へと向かった。そこで、身につけていた衣服を脱ぐと、それをバラバラに引き裂きはじめた。悪魔に憑りつかれたようなふりをして、狂人がそうするように、脈絡のない言葉を発したり、意味のないことをつぶやきはじめた。

彼の主人は目を覚まし、こうしたことにすべて、とりわけそれが真夜中であつたことに驚きを覚えた。主人はとくと考えたうえで、これは井戸の霊の仕業である、井戸の霊が這いあがって最初に出会った者に憑りついたのだ、それがたまたまアンドレイだったのだと結論した。主人は朝までまんじりともせず過ぎた。

夜明けがたに、料理人が水を汲みにやってくると、アンドレイの身のうえに起こったことを見て驚いた。彼はバケツを放りだすと、朝の祈りの祈禱歌を歌っている自分の主人のところに行き、起こったことを告げた。これを聞いた主人は、驚愕した。料理人が言うことには、アンドレイは気が違って衣服を引き裂き、井戸端にうずくまっていたからである。主人は妻と一族郎党の者らとともに外に出ると、アンドレイが狂気に陥つたのを見て激しく泣き、アンドレイはほんとうに悪霊の犠牲になってしまったのだと考えた。主人はこの災難のために悲しみに暮れ、どのようにしたらアンドレイを助けることができるのかわからず、敬虔なるレオン・マケル<sup>(10)</sup>が建立した聖なる殉教者アナスタシア<sup>(11)</sup>の教会にアンドレイを運び、手かせ足かせをはめて閉じこめておくように命じた。彼を幽閉し、食事をあたえるように、教会の堂守に多額の銀貨をもたせた。

一日じゅうぶつ通して、義人は気違ひのふりをし、瘋癲のような言葉をしゃべっていた。真夜中になると、彼は心から泣きはじめ、跪（ひざまず）き、キリストの女殉教者にたいして、自分がはじめた功業が気に入ってくださるかどうか、もしもアナスタシア様が自分に気に入ったと言ってくださり、自分を慰めるに足る者だと思ひになるならば、自分のまえに姿をあらわしてください、と祈りを捧げた。

アンドレイが泣きながら祈りを捧げるのをやめてみると、ふとこのような情景が繰り広げられているのに気づいた。5人の女性が目にはっきり見えるかたちで現われてやって来て、そのまえを大いなる誉れで誉め讃えられるある一人の老人が歩いていた。彼らは、そこに横たわっている人々の一人一人を訪ねて、彼らの周りを巡り歩きはじめた。すべての人々を訪ね終わると、アンドレイのもとにやってきて、はじめに老人が立ち止まり、つづいてかの聖なる女性たちが立ち止まった。その老人は彼を両目でじっと見つめると、何か優しいことを心に抱いて、彼に愛想よく微笑みかけた。老人は5人の艶やかな女性たちに、まるで戯れるかのように、こう言った。「女主人、アナスタシアさま、あなたはここで何の療治もなさらぬのですか？」

彼女は言った。「先生、ほかの者が療治をおこなうでしょう。この人には、誰も必要ではありません。なぜなら、あの方がこの人にこう言われたからです。『私ゆえの瘋癲の業を行え。私の王国が来た日、そなたは多くの富を得るだろう。』これが療治なのであって、この人には治療など必要がないのです。あの方はすでにその技をこの人に伝授しました。この人のことを、この人が息絶える日まで見捨てることはないでしょう。この人は神のために選ばれた器であり、聖霊によって選ばれ、愛された聖なる者なのですから。』

(9) ビザンツ教会はキリスト教徒を奴隷にすることを論難していた。

(10) 「マケル μακελλης」は、「肉屋」の意。「肉屋レオン」とはビザンツ皇帝レオン1世大帝（457-474）のこと。この作品の作者はここで、肉屋レオンと呼ぶことによって明らかに、先に出てきたレオン大帝（4世賢帝）とここで出てきたレオンとを区別している。逆の言い方をすれば、このことによって、先に出てきたレオン帝が肉屋レオンとは違う賢帝のほうだということがわかる。

(11) アナスタシアは、悪魔憑きの療治者として知られていた。

老人は言った。「私はそれを知っていました。ただ戯れに聞いてみただけです。」

彼らはアンドレイの面前でこのように言うと、アンドレイに香油をわたして教会のなかで跪くために教会のなかに入っていった。そのあと、堂守が木鐸を叩きはじめるまで、彼は彼らのだれ一人として教会から出てきたり、中に入ったりするのを見なかった。見た情景に肝をつぶして、神に似たる者は神を讃え、聖なる女殉教者が彼の祈りにただちに答えてくださったことに、この女殉教者に感謝をささげた。

一日じゅう彼は枷をはめられたままの状態であり、食物も摂らず、わけのわからない言葉をしゃべっていた。夜が来ると、真夜中になるのを待ってから、いつものとおり自らの心という秘密の聖堂で祈りはじめ、神と聖なる殉教者に祈りと祈禱を行っていたが、そこへ現身の悪魔がたくさんの悪霊を引き連れて現われた。悪魔は斧を握り、悪霊たちはナイフ、棍棒、杭、剣、槍、鎖をもっていた。これは悪魔の軍勢の千人長であり、このゆえに多くの悪霊たちは至福なる者を殺そうと悪魔とともにやってきたのだった。

まだ遠くにいるときから、腐り切った老人は唸りはじめた。年を老いた悪魔は老人の姿をとっていたからである。この老人は、手に握りしめていた斧でアンドレイを斬り殺そうと、聖なる人に飛びかかった。老人とともにいた悪霊たちも、アンドレイに飛びかかり、彼をバラバラに切り裂こうとした。アンドレイは両手をあげ、涙ながらに主に叫んだ。「あなたを信じる私の魂を、獣たちにわたさないでください。」さらに彼はこう言った。「聖なる使徒、神学者ヨハネさま、私をお助けください。」

すると、すぐさまあたかも天からのように雷鳴がとどろき、人々の叫び声が響きわたった。そして、老人が現われた。老人は大きな目をしてすこし禿げかかっており、太陽よりもまばゆく輝く顔をしていて、多くの者がつき従っていた。この老人は、自分についてきた者たちに怒りをあらわにして言った。「門を閉めよ。誰も逃げぬように。」この者たちは、悪霊たちよりも数が多く、間髪を入れず命じられたとおりに行った。すべての悪霊たちは捕えられた。そのとき、黒い者たちの一人が別の黒い者にひそかに言った。「我々がこんな所業をするように誘惑された時こそ、災難であった。なぜなら、ヨハネは過酷で私たちに厳しく制裁を加えるつもりだからだ。」

聖なる老人は自分につき従う者たちに、アンドレイの首から枷を外すように命じた。老人は門の外に立ち、配下の者たちにこう言った。「この者どもを一匹ずつ連れてくるがよい。」最初の一匹が連れだされ、地面に平伏させられた。すると、使徒は鉄の鎖を手に取り、三重に折りたたんで、それで悪霊を百回くらいぶん殴った。悪霊は人間のように叫び声をあげ、「私を憐れんでください」と言った。

このあと、次の悪霊が地面に平伏させられ、同じように打ちのめされた。

アンドレイは「我らを憐れみたまえ」と悪霊たちが叫んでいるのを聞くと、思わず笑いはじめた。アンドレイには、エチオピア人が、人間が捕らえられるのと同じように、捕えられて、ほんとうにぶん殴られているように思えたのである。三匹目の悪霊が平伏させられて、同じくらいの苦しみを味わった。なぜなら、神は悪霊という種族を辱めようと、彼らに冗談ごとではない打擲をあたえたからである。順番にすべての悪霊たちを打ちすえて、拳句、ぶん殴った者たちは、ぶん殴られ放免された者たちにこう言った。「行って自分の父であるサタンにこのありさまを見せ、おまえもこうなりたいかと聞いてこい。」

これらの者たちがちりぢりに逃げ去ると、かの白い衣を着た者たちは消えてしまった。端正な容姿の老人は神の僕のもとにやって来て、彼の首に枷をはめて、冗談半分にこう言った。「どうだ、私はおまえを助けに駆けつけただろう。なぜなら、私はおまえのことをいつも気にかけているのだから。というのも、神がおまえの面倒を見るように、何よりもおまえの救済に役立つことに心を配れとお命じになったからだ。これを耐え忍ぶがよい。そうすれば、おまえのすべての技が冴えるようになる。なぜなら、おまえにはじきに、枷からはなれ、おまえの両目で見て気に入ったところに、自由に歩き回れる時が来るからだ。」

アンドレイは言った。「わがご主人さま、あなたはいったい誰なのですか？私にはあなたが誰かわからないのです。」

老人は答えた。「私は、我らが主、イエス・キリストの、聖なる生を生みなす胸に安らう者だ<sup>(12)</sup>。こう言い

(12) 最後の晩餐のとき、使徒ヨハネは「イエスの胸元によりかかった」(『ヨハネによる福音書』13章23節)。

終わると、まるで稲妻に変わったかのように視界から消えた。

至福のアンドレイは驚き、神が言葉においても行動においても自分を助けてくださり、自分に襲いかかった暗い霊から自分を救い出してくださったことにたいして、神の慈愛を熱く讃えた。アンドレイは心ひそかにこう語った。「主なるイエス・キリストさま。そなたの力は偉大でおよびがたく、そなたの慈愛はかぎりありません。そなたは従順な私をお憐れみくださり、私のことを気にかけてくださり、私の身に驚くべき奇跡を起こしてくださったからです。これからもあなたの真実に生きる私をお守りください。私を、そなたの恩寵を見出すのにふさわしい者にしてください。高き偉大なる力よ、恐ろしい者よ、私たちを放っておかないでください。

このようにアンドレイが祈っているうちに、すこし眠り、夢のなかで皇帝の宮殿にいるのを見た。アンドレイがそこに佇んでいると、宮殿の主である皇帝が自らの傍に寄るようにアンドレイに告げた。アンドレイが近寄り皇帝のまえに立つと、皇帝は彼に言った。「そなたは全知全霊を傾けて余に仕えたいと思うか。余はそなたをわが宮廷のなかで敬われる者たちの一人にしたいと思う。」アンドレイは答えた。「そのような光栄な話をどうして断ることができましょう。というのは、私はそなたの器になりたいと思っていたのですから。」

皇帝は言った。「もしも望むなら、余の僕となる徴に食物を食すがよい。」そう言い終わるや否や、アンドレイには雪のような何かが降ってきた。アンドレイはそれを取って食べた。それはたいそう甘かった。このような甘味は、人間の知恵が何物にも喩えることができないほど甘かった。しかし、それは量がほんのわずかだったので、アンドレイはそれを食べ終わると、もっとこの甘味をくださいとひそかに心のなかで祈りはじめた。彼は言った。「なぜなら、私が食べたとき、この甘味は神の香油にも喩えられるように思えたのですから。」

皇帝は、シドン<sup>(13)</sup>のマルメロに似た何かの小さいかけらをアンドレイにあたえた。皇帝は彼に言った。「取って食すがよい。」アンドレイは取って食べてみた。それは辛く苦かった。それはヨモギよりも苦かった。このために、最初に食べた甘いよい食べ物にも嫌気がさすようになった。

皇帝はアンドレイがいやな顔をしているのを見ると、言った。「どうだ。どうしておまえはこの苦い食べ物を食すことができなかつたか、わかるか。これは余があたえる仕事そのものなのだ。余がそなたにあたえた食べ物は、余の王国の門に入りたいと思う者たちを導く、狭い悲しみの道なのだ。」

至福の者は言った。「ご主人さま、この食べ物は苦いです。この食物を食べ、そなたに仕えることのできる者はいるのでしょうか。」

皇帝は言った。「おまえは苦いということはわかつたな。同時に甘いということもわかつたのではないのか。余はそなたに最初に甘いものをあたえ、そのあと、苦いものをあたえたのではなかつたか。」

彼は言った。「そのとおりです。ご主人さま。しかし、あなたはあなたの僕に苦いものことしかおっしゃいませんでした。これこそ、悲しみの道の姿である、と。」

皇帝は言った。「ちがう。甘いものと苦いものまんなかに道はあるのだ。苦いものなかには、おまえが私ゆえに味わうことになる、苦しみと病が示されている。甘い最良のものなかには、私のために苦しむ者に報われる、涼しさ、平安、慰めが見出される。私の恩寵からは、苦いものだけが、あるいは、甘いものだけが流れ出すことはない。あるときは一方が、あるときは他方が、交互にかわるがわる流れ出す。おまえが私のためにむずかしい務めを行うつもりがあるか否かを、私にわかるように告げるがよい。」

アンドレイは言った。「私にもう一度あの食べ物をください。それを見てから決めましょう。」皇帝はふたたび苦いものをあたえ、甘いものをあたえた。苦い食べ物を食べてその味を味わうと、アンドレイはこう言った。「このようなものを食べながら、あなたにお仕えすることはできません。この食べ物は苦く、これを食べるのはつらすぎます。」

皇帝は微笑んで自分の懐から、炎のように見え、たいへんよい香りを放ち、花々に飾られた別のものを取りだした。そして、皇帝は言った。「これを取って食べ、見たこと、聞いたこと、すべてを忘れるがよい。アンドレイはこれを取って食べたが、その甘さゆえに長いあいだ忘我の境地に留まり、その大いなる喜び、大いなる芳香と栄光ゆえにわれを忘れて立ち尽くした。アンドレイはふたたび我に返ると、かの偉大なる皇帝の足も

(13) クレタ島北岸の古代都市。

とに身を投げ出し、皇帝に次のように言って懇請した。「優しいご主人さま、私をお憐れみください。いまこのときから、私めをあなたのお務めから退けないでください。なぜなら、私めは心底から、あなたの務めという道がきわめて甘いものだということを悟ったからです。この務めなしでは、誰のまえでも自分の頭（こうべ）を垂れることはないでしょう。」

皇帝は答えた。「この食べ物に驚愕に値することがわかったか。余を信ぜよ。これは余の善きもののなかで、もっともつまらないものである。しかし、そなたが余の心を安らかにするならば、これらはすべておまえのものとなり、余はそなたを余の友人とし、余の王国に安らわせ、余の後継者とするであろう。」皇帝はこう言った。それは皇帝がアンドレイを功業へと差し向わせるかのごとくであった。そのときちょうど、アンドレイは目を覚ました。至福の者はこれらすべてを心に留め、驚嘆を覚えながらこう言った。「これはいったいどういうことなのだろう？」

まる4ヶ月、アンドレイは聖なるアナスタシアの教会にいたが、彼はよくなるどころか、まったく逆に、健康状態が悪化してしまった。これを見ると、教会の堂守たちはアンドレイについてその主人にこのことを伝えた。このことを聞くと、テオグノストスはアンドレイが間違いになってしまったのだ、悪魔憑きになってしまったのだと思ひこみ、彼のことをあきらめ、彼から枷を外し、自由の身にするように命じた。教会の堂守たちはアンドレイから枷を外し、彼を解放した。長いあいだ念願であったことが叶ったのを見ると、アンドレイは自分の意志を実現してくださった神を讃えた。

(つづく)

#### 〈解説〉

ツァリグラードのアンドレイにかんする本は、ルーシできわめて人気があった。このことは、200以上におよぶ中世ロシアの写本のなかにこの作品が収められていることからわかる。この作品が成功したのは、第一には、内容が並はずれて面白く、翻訳の質が高かったこと、第二に、スラヴ人においてもっとも広まった編纂本の中世ロシアの翻訳で、アンドレイは«σκύθης»「スキタイ人」であったとされていたことによる。中世ギリシア語で「スキタイ人」とは、クリミア半島の北方に居住するスラヴ人のことを指していた。すなわち、東スラヴ人たちにとって、コンスタンティノーブルの聖者アンドレイは同国人だったのである。さらに後代の写本では、アンドレイが「ルーシ人」あるいはノヴゴロド人であったとさえされている。

イエズス会士ボランとその後継者たちは、アンドレイをレオン6世（賢帝、866-912）の同時代人と考えてきたし、正教百科事典でも、以下に述べるコンスタンティノーブルのヴラケルネ教会における神の御母の顕現を、910年のアラブ軍によるコンスタンティノーブル包圍のさいの事件としているが、スレズネフスキイ、ヴェセロフスキイ、モルドヴァンらロシアの学者たちは、教会の伝承とは別個に、アンドレイは5世紀から7世紀にかけてのある時期に生きた人物であると考えてきた<sup>(14)</sup>。この校訂テキストを編集したモルドヴァンは、『アンドレイ伝』において言及される一連の人物、都市のレアリアから、物語の主人公、アンドレイは5世紀に生きていたと見なしている。

一方、『アンドレイ伝』のギリシア語原典は、もしもその結びに現われる書きこみを信じるならば、コンスタンティノーブルでソフィア聖堂の司祭、ニキフォルによって書かれた。いつ書かれたかという問題にかんしては、モルドヴァンは次のように述べている。「この物語の作者は、自分がアンドレイの同時代人であり、友人であるかのように諸事件を描いているが、実際は、それは文学的技法にすぎない。なぜなら、『アンドレイ伝』の内容の特性から判断して、この作品が9世紀終わり、ないしは10世紀はじめより以前に書かれたことはありえないからである。執筆にさいして、作者とされるニキフォルはさらに古い時代の伝承を利用したにすぎないように見える。」<sup>(15)</sup>

(14) «Андрей Юродивый» // Энциклопедический словарь Брокгауза и Ефрона. Т. 2. СПб., 1890; Православная Энциклопедия под редакцией патриарха Московского и всея Руси Кирилла. Т. 2. М., 2001.

この作品において特記すべきことは、ムスリムに包囲されたコンスタンティノープルのヴラケルネ教会において、聖アンドレイと聖エピファニーに神の御母が現われたという証言が含まれていることである。敵から町を守ってほしいと懇願する人びとのまえに現われた神の御母は、「その聖なる頭と肩を覆っていた、稲妻のように輝く布（マフォリオン）を取り去り、自らの聖なる腕にとると、それをそこに立っていたすべての人々のうえに広げた」という。

このことを記念してルーシでは、聖なる神の御母の庇護の祝日（ポクロフの日 Покров день、グレゴリウス暦10月14日、ユリウス暦1日）が定められたが、それはアンドレイ・ボゴリユプスキイ公が、ムスリムに改宗していたヴォルガ・ブルガル族を討った1164年ころだと考えられている。翌年には、征服したカマ川上流域の石材を使用して、のちに中世ロシアの白鳥（リハチョフ）と呼ばれることになるポクロフ・ナ・ネルリ教会が建立された。この教会はこの戦役の戦勝記念であると同時に、そのさい戦死したアンドレイ公の息子イジャスラフへの追悼のために建立された<sup>(15)</sup>。ちなみに、ビザンツの教会暦には、この祝日は存在しない。

ポクロフの日の前後にロシアでは初雪が降り、雪が大地を覆う（ポクリバーチ=ポクロフ）ので、この日はロシア民衆によって冬のはじまりの日と捉えられている。ポクロフにかんしては、ロシア民衆に別の伝承がある。旅の途上にある神の御母に宿を貸すことを拒否した住人たちを、預言者イリヤが罰した。それを憐れんだ神の御母は、村に覆い（ポクロフ）を広げて村人たちを救い、のちに村人たちは善良で旅人に親切な人々になったというものである<sup>(16)</sup>。このポクロフは雪の暗喩であろう。冷たい晩秋の雨が雪に変わり、マローズ（酷寒）が訪れると、ぬかるんだ悪路は櫓の通れる快適な道になる。ロシア民衆にとって、冬のはじまりはむしろ喜ばしいことなのだ。コンスタンティノープルの話も、ロシア民衆の話も、神の御母の憐れみがテーマとなっていることは注目に値する。

キリストにおける佯狂（Юродство、癡癲の行）は、キリスト教自体の歴史と同じくらい古い。たとえば、『コリントの信徒への手紙 一』3章18-19節では次のように書かれている。「だれも自分を欺いてはなりません。もし、あなたがたのだれかが、自分はこの世で知恵ある者だと考えているなら、ほんとうは知恵のある者となるために愚かな者になりなさい。この世の知恵は、神のまえでは愚かなものだからです。」あらゆる時代において、佯狂はキリスト教と表裏一体の関係にあり、イエス・キリストによってあたえられた、より高次元の天上の真実への熱狂的で自己犠牲的な献身というかたちを取った。佯狂者たちは自分なりのやり方で、キリストの地上における功業を再現しようとしていた。荒野修道士や隠修士と異なり、佯狂者たちは人々のあいだに暮らしながら、最高度に困難で厳しい誘惑と試練にわが身を晒し、毎日毎時間この世の不条理を暴き、自らの外見と逆説的な言行で、より高き裁きがあることを警告しつづけた。こうした佯狂の修行形態をとった聖者は、ビザンツでは「サロス」と呼ばれ、アンドレイのほかにも6世紀のシメオンが知られているのみだが、この修行形態はロシアに流入して著しい発達を遂げた<sup>(17)</sup>。

ギリシア語の作品は、大小さまざまな、およそ100個を数える物語から構成されており、アンドレイの経験した事件や奇跡、コンスタンティノープルに暮らす人々と彼らの身の周りで起こった出来事が物語られている。これらの話はかならずしも純粹に聖者伝的な主題とは密接な関係をもつものとはいえないし、しばしばそうした主題とまったく関係をもたないこともある。とりわけ注目すべきなのは、神を愛する賢い貴顕出身の若者、エピファニーが頻繁に登場することである。エピファニーは佯狂の行をしなかったが、禁欲的で純潔な生活と深い知恵ですべての人々を驚かせ、『アンドレイ伝』の述べるところによれば、のちにコンスタンティノープル総主教になった。

このようなわけで、『アンドレイ伝』は聖者伝的な作品であるというよりも、中世のロマンスの雰囲気の色濃く残す著作というほうがふさわしく、実際の事件についての歴史的物語という性格はほとんどない。この作

(15) БЛДР. Т. 2. С. 541.

(16) Воронин Н.Н. Владимир. Боголюбово. Суздаль. Юрьев-Польской. М., 1958. С. 156-158.

(17) «Покров день» // Славянские древности. Т. 4. М., 2009; Русский праздник: праздники и обряды народного земледельческого календаря. СПб., 2002. С. 433-438.

(18) 中村喜和「癡癲行者覚書」『言語文化』（一橋大学）6号、3-26頁。

品は末尾に、中世ロシア文学の伝統のなかで『エピファーニイの問いと聖なるアンドレイの答え』と題されるかなり大部の章をもつ。このなかで、アンドレイは質問に答え、世俗の制度について、さまざまな自然現象について、聖書の解釈について、終末論的な予言（いわゆる『佯狂者アンドレイの黙示録』）そのほかについて解説を加えている。

『佯狂者アンドレイ伝』は、その多様で鮮烈な内容によって、ルーシにおいて佯狂という概念が広まるにさいして多大な影響をあたえ、同時に、ルーシの佯狂者の聖者伝が書かれるときにその史料となった。『アンドレイ伝』の中世ロシア語の翻訳はおそらく11世紀に、おそくとも12世紀はじめにはおこなわれていたらしい。この翻訳聖者伝の断片がすでに、12世紀半ばに作成されたことがはっきりしているプロローグ（曆聖者伝）の第一編纂本に、手が加えられたかたちで入っているからである。『アンドレイ伝』のスラヴ語の最古の翻訳は、ギリシア語テキストをもっとも多く反映するが、この第一編纂本のほかに、南スラヴ起源の第二編纂本も存在する。この第二編纂本は、第一編纂本とは独立して14世紀以前に編纂されたが、著しい拡張性は見られない。

『アンドレイ伝』は個々の物語やエピソードに分かれる（ギリシア語版では、245のエピソードに分割される）が、作品のこのモザイクのような性格ゆえに、ギリシアやルーシの文筆家は、作品の個々のエピソードをさまざまな文集を編むさいの資料として活用してきた。このために、プロローグの多くの写本のほかに、文集という構成をもつ何十という別の写本に、『アンドレイ伝』のさまざまな物語や断片が収録されている。こうした文集のテキストのなかに、ギリシア語の短縮編纂本からの、内発性をもついくつかの翻訳や、本書であつかう編纂本からの抜粋がある。

本稿の翻訳は、A. M. モルドヴァンによる校訂テキストにもとづくものである。A. M. モルドヴァンは、基本的に中世ロシア語翻訳の最古の写本（*РГАДА*, Син. Тип. 182）にもとづき、写本の欠損部分は、15世紀にこの写本から複写された写本（*РНБ*, Сол. 216）によって補完した。明らかな書き間違いや誤りは、近親関係にある写本（*РГБ*, Егор. 162）によって補正した。テキストの解釈が原因で歪曲されたと思われる箇所は、ギリシア語テキストと対照させながら、別の編纂本とテキスト・グループの諸写本（*РГБ*, Тр. Серг. 780; *РГБ*, Тихонр. 29; *ГИМ*, Син. 924; *РНБ*, Сол. 214）によって復元した。ギリシア語との対照は、バヴァリア州立図書館蔵写本 *Монас. 552* によっておこなわれている。